

Toni Morrison, *Home* : Cee の自立とキルト

宮崎 弓佳里

要旨

アフリカ系アメリカ人として初めてノーベル文学賞を受賞した女性作家 Toni Morrison の10作目となる小説 *Home* (2012) は、つらい体験を乗り越える兄と妹を描いた作品である。これまで朝鮮戦争から PTSD となり帰還した兄 Frank を中心に論じられてきた *Home* を、本論では作中で描かれるキルトに着目することで、妹 Cee を中心に捉え、他者に依存していた彼女の自立と人間関係の再構築について考察したい。まず、Cee が一度は去った故郷の町に瀕死の状態に戻り、町の女性たちから看病と支援を受けながらキルト作りを通じて精神的自立、そして経済的自立の必要性を学ぶまでを考察する。さらに、Cee が初めて作った大切なキルトを人骨の埋葬に使用することで、Cee の自立の妨げとなっていた兄との依存関係が対等な関係へと変化するまでを考察する。これらの彼女の変化を、キルト作製における様々な色彩の「布片」(piece) を自分の意志で選び縫い合わせて、まとめた「1枚のキルト」(whole) と重ね合わせ、さらには、Cee を取り囲む人々との関係の再構築を重ね合わせることで、*Home* におけるキルトの役割を明らかにしたい。

キーワード : Toni Morrison、アフリカン・アメリカン・キルト、精神的自立、
経済的自立、人間関係の再構築

はじめに

アメリカの女性作家 Toni Morrison (1931~2019) は、*The Bluest Eye* (1970) から *God Help the Child* (2015) まで11冊の小説を出版した。作品のすべてがアフリカ系アメリカ人にかかわる内容であり、時代設定もアフリカで生活していた人々が奴隷として連れてこられたアメリカ建国前から、アフリカ系アメリカ人として暮らす現代

までと長きにわたる。

Morrison は「作家としてのキャリアを通して白人によって書かれたアフリカ系アメリカ人不在のアメリカ文学に異議を唱え、想像力／創造力を駆使してアメリカ文学史の闇を明らかにしようとし」¹⁾ た。さらに、Morrison が創造した女性たちには「外部から押し付けられた差別の歴史の産物である黒人女性のステレオタイプを生きることを拒んで、新しい生き方、新しい自己を試行錯誤しながら作り出す勇気と創造性」²⁾ があるといわれる。そして、アフリカ系アメリカ人の問題にとどまることなく、政治的な介入でもなく、論文、絵本、戯曲など数々の作品の発表といった自身が持つ芸術的才能で社会の不均衡を明らかにしようとした³⁾。1993年に受賞したアフリカ系アメリカ人初となるノーベル文学賞をはじめ、ピューリッツァー賞など数々の賞を受賞している。

本論で取り上げる Morrison の10作目の小説 *Home* (2012) は、兄 Frank Money と4歳違いの妹 Cee (Ycidra) が過去に起きた悲惨な出来事を乗り越えていこうとする姿が描かれている作品である。本作品の題名である home という言葉そのものの本来の意味は、故郷、および人々が住む建物としての家であるが、ふたりが育った町であるジョージア州ロータスに嫌気が差した兄に続き妹も一度は町を離れたものの、ふたりがこの町を故郷としての home と認識するまでの過程が描かれている⁴⁾。序文の詩、Frank が架空の人物に独白のように語る一人称でイタリック体を使って書かれた章、および、この独白の章とほぼ交互に配置されている Cee の独白を含む三人称で書かれる広い視野から見た章の全17章から構成されている。

これまで Morrison の作品は、主にアフリカ系アメリカ人の人種差別、共同体、およびルーツの探求、歴史の語り直し、差別に由来するトラウマおよび羞恥の問題から研究されてきた⁵⁾。*Home* においても、論点は朝鮮戦争の退役軍人であった Frank を中心に故郷の在り方、および戦争で受けたトラウマに集中していた⁶⁾。本論では Cee に焦点を当て、Morrison が *Home* の中でキルトに与えた役割について考えたい。キルトは上布、中敷き、裏布3枚を刺し縫いした掛け布団ではあるが、上布に用いる布の色彩の組み合わせにより装飾的な意味合いも兼ね備えている。Morrison は *The Bluest Eye* 以来、*Paradise* (1998)、および *A Mercy* (2008) 以外の作品の中でキルトを描いており、Kimberly Junita Brown が指摘しているように、キルトは「印象的でありながらもさりげなく繰り返し」用いられている⁷⁾。Morrison とキルトに関する研究は、初めてキルトが色彩を持って具体的に描かれる作品 *Beloved* (1987) 以来度々なされてきた。同様に、Morrison は *Home* においてもキルトに特別な役割を与えたと考えられる。しかし、これまでの *Home* の研究でキルトはコミュニティーの女性たちが作るキルトと Cee への援助を関連付けて「キルトは連帯の象徴」⁸⁾ であり、キ

ルトを「自身が制作する立場になることで、自立した自己を確立する道具として機能」⁹⁾している点は指摘されているものの、具体的に Cee の自立の過程においてキルトが重要な役割を果たしていることへの言及は十分とは言い難い¹⁰⁾。

本論ではキルト作りが Cee の精神的・経済的自立につながり、過去の出来事に向き合い乗り越え、兄への依存関係から解放された Cee と兄との対等な関係が「クレヨン色」(“crayon-colored”) (144) と言いあらわされるキルトに集約されていると捉え、キルトを中心に Cee の自立がキルトとどのように関連付けて描かれているのかを考えていく。まず 1 では、兄により瀕死の状態 Ethel の家に運び込まれた Cee が、他者への依存状態から精神的に自立するまでをキルト作りと重ね合わせて考える。2 では、精神的自立を果たした Cee が、売るためのキルト作りを通じて他者との関係に目を向けられるようになり、経済的自立を果たそうとするまでを考える。3 では、兄の強い希望によって Cee が初めて作ったキルトに白骨化した遺体を包み埋葬を果たすという出来事を通して、Cee には他の人の役に立つという証となり、兄には過去の出来事と向き合ったことにより妹を守らなくてはいけないとの強迫観念から解放されるまでを考える。最後に、Ethel の家から兄が住む家に戻り自立した Cee と、その姿を見たことにより過去の出来事と対峙した兄とを、埋葬に用いたクレヨン色のキルトと重ね合わせ、今後この家で自分の意見をはっきりと伝えつつも互いに尊重し合う本来あるべき対等な兄と妹との関係の再構築を考察したい。

1. 精神的自立としてのキルト

ここでは、Ethel の家に集う女性たちの関係が彼女たちによって作られるキルトにどのように反映されて描かれているのか、および、Cee が身体を回復させるためにこの家に集まる女性たちに囲まれ過ごした 2 か月間で、これまで自己肯定ができずに相手に依存していた Cee が精神的に自立していく過程とキルトがどのように結びつけられて描かれているのかを考察したい。

Cee は、仕事で忙しい両親の代わりに世話をしてもらっていた祖母 Lenore から虐待を受け、それを庇うかのように面倒を見てくれる兄に頼り切って子ども時代を過ごしてきた。このため、成長してからも自分で物事を決められなく、相手の顔色をうかがい、たとえ嘘であったとしても相手の話に合わせてしようとする自分の意見を持たない性格となっていた。兄の入隊により誰も頼る人がいなくなった Cee が次に頼ったのは、アトランタから来ていた男性、自称 Prince であった。ふたりは祖母の車でアトランタへ行き生活を始めるものの、1 か月も経たぬうちに Prince は車とともにいなくなってしまい、Cee は車なしでは祖母が怖くロータスには帰れないため、診療所の

住み込みの仕事を見つける。しかし、そこでは子宮を観察する器具を開発するための人体実験が行われており、何も知らずにこの実験に応じていた Cee の体調は悪化する。長年診療所で働いていた女性から Cee の容体悪化の知らせを手紙で受けた Frank は Cee を診療所から助け出したのだが、向かった先は祖父母の家ではなく、今は亡きふたりの両親が住んでいた家の近所に住む Ethel Fordham の家であった。ここで Cee は Ethel をはじめこの家に集まる女性たちからキルト作りを習った。

以下は、Cee が Ethel の家でそこに集う女性たちから看病を受け1ヶ月が経ち、ようやく起き上がれるようになった際の描写である。

As she healed, the women changed tactics and stopped their berating. Now they brought their embroidery and crocheting, and finally they used Ethel Fordham's house as their quilting center. Ignoring those who preferred new, soft blankets, they practiced what they had been taught by their mothers during the period that rich people called the Depression and they called life. Surrounded by their comings and goings, listening to their talk, their songs, following their instructions, Cee had nothing to do but pay them the attention she had never given them before. (122) (下線、[] 筆者、以下同じ)

この1ヶ月の Cee に対する Ethel たちの態度は、痛がる Cee に容赦ない罵声を浴びせながら治療をするという手厳しいものであったが、これは彼女たちの「戦術」(“tactics”)であった。つまり、Ethel の手厳しさには Cee を自立させたいとの思い、「厳しい愛」(“the demanding love”) (125) があったのである。女性たちは思い思いの手仕事を持って Ethel の家に集まっていたが、最終的に共同で始めたのはキルト作りであった。Ethel の家が「キルト作りの中心地」(“quilting center”)になったのである。この作品が設定されている1950年代中頃は工場で生産される毛布の質も上がり、キルトは掛け布団として使用されなくなっていた。彼女たちがキルトを作製できるのは、1930年代の大恐慌の際に母親から作り方を教えてもらっていたからである。この時代は裕福な人にとり「大恐慌」(“the Depression”)ではあるが、アフリカ系アメリカ人の彼女たちはこれまで以上の苦境に立たされていたはずである。しかし、困窮を極めた時代であっても日々の生活を「人生」(“life”)と受け止め、母は娘にキルト作りを教えていたのであった¹¹⁾。

容体が安定し起き上がれるようになったばかりの Cee は、彼女たちを見ているしかなかった。Cee はこれまで自分に起こったことのすべては、仕事で忙しく娘に愛情を示す余裕すらなかった母、いつもつらく当たる意地悪な祖母、また若者には何の魅

力も教育施設さえないロータスの町に原因があると思っていた。しかし、あらためてこれまで育ってきたロータスの女性たちの動向に注意を向けるようになると、今までは気が付かなかった彼女たちの一面が見えてきたのであった。

この家に集まる女性たちは、顔立ち、服装、話し方はもちろんのこと食べ物の好みや Cee の治療に対する意見は異なる。また、家庭の事情も異なっている。Ethel 自身も一人息子をデトロイトで殺害されていた。朝鮮戦争で戦死した Frank の幼馴染の母親もいる。身体に障害がある女性もいる。しかし、彼女たちは自分にも、また自分を必要とする人にも責任を持ち、質素でありながらも皆で分かち合う無駄のない生活態度という共通点を軸に、皆で話し合い、それぞれが自己主張をしつつ相手のことも尊重して交流していることに Cee は気が付くのである。

藤平育子は、*Beloved* の中で描かれる登場人物の「断片」であった身体が「全体」としての人間性を取り戻していく点に着目し、Morrison の作品にはキルトのモチーフが用いられていると述べている¹²⁾。同様に、Ethel の家に集うこのような個性豊かな女性たちの関係は、様々な色彩の布が組み合わせられて1枚の布となるアフリカン・アメリカン・キルトに重ね合わせて語られていると考えられるのではないだろうか。アフリカン・アメリカン・キルトとは、奴隷としてアフリカ大陸からアメリカに連れて来られた人々が、祖国で作っていたキルトの特徴を残しつつアメリカに根付いたキルトである¹³⁾。大胆なデザイン、非対照的、強烈な色彩などの特徴があげられる¹⁴⁾。つなぎ合わせる「布の1片」(piece) に大胆な色彩を用いながらも、その小さな布の色の組み合わせを作者が選び取り配置することによって全体的な美しさが決まる。ひとつの色が目立っても、また同じ色だけが目立っても美しくは仕上がらない。色彩の調和が取れたキルトだからこそ、全体的に調和が取れた美しい「1枚のキルト」(whole) になるのである。Ethel の家に集まる女性たちの関係も、調和が取れたキルトのようである。それぞれが「個別の自己」(piece) を持ち、その自己という個性を生かしながら互いの意見を尊重し助け合うことで「調和の取れた人間関係」(whole) を形成し、ひとつにまとまっているのである。

このような女性たちと生活した2か月ほどで、Cee にも変化が見られた。Cee がこれまで自己肯定をできずにいたのは、祖母から言われ続けた「排水溝生まれの女の子」(“gutter child”) (45) というレッテルが正しく、自分が価値のない人間だという思い込みからであった。兄を慕っていたのも、このような状態の中で兄が唯一自分を肯定してくれるからであった。しかし、Ethel の家に集まる女性たちと接したことで、たとえ容姿や考え方が違って、自分の考えを持ちそれを自分の意見として相手に伝えることの大切さに気が付いたのであった。そして、誰かに助けってもらうのではなく、自分のことは自分で責任を持つ人間になりたいと考えられるようになったのであった。

これらのことに気が付いた Cee が目指したのは、「安定した新しい自分、自信があって明るく、多忙な自分」(“her newly steady self, confident, cheerful and occupied”) (135) であった。

Cee の精神的自立は、2 か月後 Ethel の家からかつて両親が住んでいた家に戻り、子どもを持ってない身体になった事実を兄に伝えた際にみられる。この時兄は、Cee を慰めるために子どもの時からしてきたように Cee の首筋に手を当てようとした。しかし、Cee はその手を押しつけたのだ。自分のことは自分で責任を持つと考えた Cee には、もう兄の慰めはいらなかったのである。以下は、自分の感情を押し殺すことは必要なく、つらい真実であっても受け止めることにしたと兄に告げた後の Cee の描写である。

She [i.e., Cee] simply went to the sofa, sat and began re-sorting quilt pieces.
Every now and then she wiped her cheeks with the heel of her hand. (132)

Cee はキルト作りのための布が置いてあるソファーに行き、涙をぬぐいながらもキルト作りを始める。このキルトは、Cee には2枚目のキルトとなる。「キルトのピースの選び直し」(“re-sorting quilt pieces”)とは、キルトに使う布をどのように配置したらいいのかを考え直すことではあるが、配色を考えるのはキルト作りの第一歩である。Ethel の家では女性たちに手伝ってもらい配色を決めていたが、今度は自分で色を選択し自分ひとりでキルトを作るのである。

泣きながらも配色を考え直している Cee は、心の整理をしながら平常心を保とうと努力しているようでもある。自分が子どもを持ってなくなった事実はつらいことではあるが、兄の助けを借りずに、また、怒りを爆発させて暴力的になるのではなく、「彼女は事実を知り、受け入れ、キルトを作り続けることができた」(“She could know the truth, accept it, and keep on quilting.”) (132) という姿に、兄や Prince の考えに従っていたこれまでとは違い、自分のことは自分で決める Cee の精神的自立がみられるのである。

どのようなキルトに仕上がるのかは Cee 次第である。これまで人に依存していた Cee が自分でキルトの布の色彩を決めるといった自己選択をし、どのようなキルトに仕上げるのかも Cee の自由である。同時に、出来上がったキルトの仕上がりがどのようなものであっても、自分で作った物である以上自己責任として引き受けなくてはいけないことも Cee は学ぶのである。

2. 経済的自立としてのキルト

精神的に自立した Cee が次に考えるのは「生計を立てるだけのお金を稼ぐ手立て」(“a way to earn a living”) (47)、つまり経済的自立であった。ここでは、Cee が経済的に自立をしていこうとする過程がどのようにキルトと結び付けられているのかを考察したい。

これまでに、Cee はひとりで生計を立てようとしたことがあった。アトランタで Prince に出て行かれた後である。しかし、Cee にできたのは、家賃の安いアパートへの転居と皿洗いの仕事を探す程度であった。この時 Cee は20歳だと考えられるが、収入を得るための特別な技術が身につけていない Cee に思いつくのは、調理補助の仕事か、チップがもらえるウェイトレスに昇格する、またはダブルワークをすることくらいであり、現在の状態では生活を維持していくためには不十分なのであった。

一方、Frank と Cee を助けるのは、手に職のある女性たちである。美容院を営んでいる Mrs. K は、ロータスの若者に性的手ほどきをしていたために町の人々からは嫌な顔をされてはいるが、美容師としての腕前は皆から認められている。Lenora の家で家事手伝いとして働き Ethel の家にも出入りしていた Jackie は、12歳であるにもかかわらず彼女の持つ家事の技術を存分に活用し賃金を得ていた。その家事能力は、意地悪な Lenore でさえも Jackie がきちんと拭き掃除ができないのは適切なモップを与えなかったためであると思わせるほどであり、特にアイロンがけは完璧であった。

Home で描かれる自分の技術で生計を立てることができる女性たちの中で仕事と将来の希望とをはっきりと結び付け描かれているのが、Frank が退役後に数か月間同棲していた Lily (Lillian Florence Jones) であろう。現在 Lily はクリーニング店で働いてはいるが、かつては舞台衣装の裁縫師として劇場で働いていた。クリーニング店で働くよりも裁縫師の仕事の賃金がよかったのは、Lily が持っていた「縫物をするための技術」(“sewing skills”) (71) が存分に発揮できたからであった。これらの技術は母から教えてもらっていたのだったが、父からは「自分の才能を見つけて、それを伸ばせ」(“Find your talent and drive it.”) (80) と言われて育った。この技術と劇場での裁縫師としての経験、さらには父からの助言によって、いずれ自分の家を買ってそこで洋裁店を開き、将来は衣装デザイナーになりたいという野心を持てる女性として Lily は描かれているのである。

Cee には生計を立てるための技術は何もない。先に述べたように Ethel の家に集う女性たちは母親から幼少期にキルト作りを習っていたが、Cee の母は働くのに精一杯で娘に縫物を教える暇などなく、Cee はスカートの折り返し縫いさえもできなかった

のである。このような Cee にキルト作りを教えたのは、Ethel の家に集まる「熟練した技を持つ女性たち」(“skilled women”) (128) である。最初、女性たちは Ethel の家に刺繍やかぎ針編みなど、各自が思い思いに好きに持ち寄って作っていた。その後キルト作りに統一したのは、特別な道具もいらず針と糸で直線縫いさえできれば作れるキルトは、Cee が習得しやすいと考えた彼女たちの「戦術」(“tactics”) (122) のひとつであったと考えられる。

Ethel の家から両親が住んでいた家に戻った Cee は、今度はひとりで 2 枚目となるキルトを作り始めていた。以下は、仕事を終えて帰宅した兄がソファの上に置いてある布切れの山について尋ねた場面である。

“What’s all that stuff on the sofa?” A pile of cloth scraps had been there for days.

“Pieces for quilting.”

“You ever need a quilt down here in your whole life?”

“No.”

“Then why you making one?”

“Visitors buy them.”

“What visitors?”

“People over in Jeffery, Mount Haven. Miss Johnson from Good Shepherd buys them from us and markets them to tourists down in Mount Haven. If mine turns out to be any good, Miss Ethel might show it to her.”

“Nice.”

“More than nice. We scheduled for electricity soon and running water. Both cost money. An electric fan alone is worth it.” (127)

先に述べた通り、この時代にはキルトは掛け布団としては使われなくなっていた。しかし、もし上手くできたならば Ethel を通じて教会が Cee のキルトを買い取ってくれ、観光客に販売してくれるというのであった¹⁵⁾。奴隷として農園で働いていた女性たちが奴隷主のため、または自分たちの家族のための日用品として作っていたキルトは、この時代には工芸品として売られるようになったのである。商品として販売するためのキルトを作るためには、商品として見合うキルトを作製するための技術の獲得だけでなく、購入してくれる相手の好みに合うキルトを作ろうという強い意欲も必要である。Lily が裕福な家庭の依頼でウェディングベールを作りその後特別注文が入ったのは、そこで技術的な高い評価を受けたためではあるが、顧客の信頼を勝ち得

たからであるともいえる。自己満足ではなく、他者を満足させようという強い意志が顧客に通じたのである。

Cee の話を聞いた兄は単に「いいね」(“Nice”) とだけ答えるが、Cee にとり自分が作製したキルトを販売できるということは意義のあることであり、「いい以上」(“More than nice”) なのである。キルトが売れて収入が得られれば、この家に電気と水道設備を整えることができるという計画を立てられるのであった。川上亜樹が述べる通り、電気と水道は「共同体のインフラ整備に活用されることになっている」¹⁶⁾。しかし、Cee は扇風機が欲しいとも思っている。少しでも日々の生活を快適にしたいと考えているのである。あくまでも、Cee が上手くキルトを縫えるようになった場合の話ではある。この場合の「私たち」(“We”) とは Ethel の家に集う女性たちであり、Cee も含まれている。女性たちは経済的自立が生活の向上に結び付くことを Cee にしっかりと教え、Cee にもその教えが身につけてきたのである。

経済的に自立をすることは、収入を得ることだけではなく、得た収入をどのように使うのか、その使い方も自分で考え実行することである。Ethel の家に集う女性たちの家の庭に余分な物がないのは、すべてを分かち合い活用するからである。無駄にしないとは、同時に物を大切にすることでもある。小さな布の切れ端をつなぎ合わせて作るキルトも、本来捨てられてしまいそうな布をつなぎ合わせ 1 枚の大きな布にすることで、布の有効活用になっている¹⁷⁾。彼女たちは学問としての知識はないが、何事も無駄にしないという彼女たちの生き抜くための術 (“skill”) が、キルト作りに重ね合わせて描かれているのである。彼女たちが無駄にしないのは物に対してだけではなく、時間に対しても同様である。おしゃべりも歌うのも何か作業をしながらであり、時間の無駄なく立ち振る舞うのである。このような女性たちから Cee はすべてを無駄にしない生活態度を学んでいったのである。

精神的自立を果たした Cee が販売するためのキルト作製を通じて、自己満足の甘えを許さず、さらに他者に全面的に依存、あるいは迎合することなく、自分にしか作製できない固有の作品を提示し、その作品で他者を満足させることが必要であると気づいた時、Cee の人間関係に対する意識は変わる。孤独の中に閉じこもるのではなく、それぞれ自己意識を持った人間同士の対等な関係の中で、自分の最良のものを提示し相手に受け入れてもらおうとする努力こそが Cee の経済的自立の根本的な問題であることが、キルト作りを通じて明らかにされているのである。

3. 埋葬のためのキルト

キルト作りを通して精神的自立を果たし、経済的自立を通して他者との対等な関係

を学んだ Cee が、最も親しい他者である兄 Frank と新しい対等な関係を築いていく過程を、埋葬に用いたキルトと重ねて考えていきたい。Cee がキルトを作りながら子どもを持ってなくなったという事実と向き合う姿を見た後、Frank は彼を悩ませていることを解決するために Cee が作ったキルトを渡すように言うのである。Frank は人骨を埋葬するために Cee のキルトを使いたいと考えていたのであるが、ここでは Cee と Frank がこの人骨に抱くそれぞれの思いと、Frank が Cee が初めて作ったキルトを埋葬に使いたいと強く願った理由についてまず考察し、それを踏まえうえて埋葬の意味を兄と妹の関係の再構築として考察したい。

これを考える上で、ふたりに強い印象を与えた過去の出来事について述べたい。子どもの時に Frank が Cee を連れて種馬飼育農場に馬を見に行った際、偶然に死体が遺棄される現場を目撃してしまった出来事である。死体が乱暴に遺棄される場面の目撃はふたりに強烈な印象を残した出来事であるため、Frank だけではなく Cee 自身も覚えていた。しかし、この時に見た遺体は、種馬飼育農場で闘犬の代わりに父親とその息子がどちらかが死ぬまで闘わねばならないゲームをさせられ、その結果死亡した父親の方であった。生き残った息子の Jerome がロータスの町に助けを求めにきて、そこで何があったのかを町の人たちに説明し、Ethel などが支援して Jerome の逃亡を手助けしたのであった。この出来事は、町の男たちはもちろんのこと、「あの血だらけで、脅えていた男」(“Like that man, bloody and scared”) (46) と Cee の記憶にも残っていたのであった。

まず、初めて作ったキルトをこの白骨の埋葬に使うとは、Cee にとりどのような意味を持つのかを考えたい。以下は Cee が兄からキルトを渡すように言われた場面である。

Cee refused to give up the quilt. Frank wanted it for something, something that was bothering him. The quilt was the first one she had made by herself. As soon as she could sit up without pain or bleeding, neighborhood women took over the sickroom and started sorting pieces while they discussed her medications and the most useful prayers Jesus would take notice of. They sang, too, while they stitched together the palette they had agreed upon. She knew her own quilt wasn't very good, but Frank said it was perfect. Perfect for what? He wouldn't say. (141)

兄は半ば強引に、Cee の作ったキルトの埋葬への使用、および立ち合いを Cee に求め、キルトについても「完璧」(“it was perfect”) だと言うのみで理由を話してはい

ない。兄は Ethel の家に立ち入れなかったため、Cee がそこで何をしていたのかを知る手段は限られており詳しくは知らないはずである。ソファの上に作りかけのキルトが置いてあるのを見て驚いた時も、Cee が兄にキルトが収入になる話をした時も兄の返答は「いいね」(“Nice”) (127) と短かったことからわかる通り、兄はキルトにもキルト作りにも一切無関心であった。ただ埋葬に Cee が作ったこのキルトがどうしても必要だったのである。

一方 Cee にとり、このキルトは初めて作ったキルトであり、Ethel の家で体調が落ち着いた後に Ethel の家に集う女性たちと話したり歌ったりしながら作ったキルトである。Cee はこのキルトについて「雑な作りではあるが、平凡なパターンと計画性のない色合わせが気に入って大切にしていたキルト」(“Sloppy as the quilt was, she treasured its unimpressive pattern and haphazard palette.”) (142) と捉えている通り、Ethel の家で過ごした 2 か月の思い出が詰まっている大切なキルトなのである。

兄からは誰の人骨なのかについての説明は一切ない。しかし、兄が掘り起こした白骨に目を背けずにじっと見つめたのは、今の Cee がかつての「世の中で行われていた虐殺」(“the slaughter that went on in the world”) (143) に恐れおののき兄の慰めが必要だった子どもではなく、現実を直視するという精神的自立を果たしているからである。この「虐殺」とは子どもの時に兄と見た残酷な死体遺棄のことを示すため、Cee は兄が掘り起こした白骨をこの時に殺害された男性だと思っていることになる。この大切なキルトで子どもの時に目撃した残酷な殺され方をした男性の骨を包み埋葬するのは、自分は無能だと信じ込んでいた Cee が、Ethel から言われた「世の中で何か良いことをする」(“do some good in the world”) (126) 人間になりなさいとの言葉を実行に移せたことになり、Ethel の家に集う多くの女性のように誰かの役に立つことができたという証になったのである。

次に、Frank にとり妹が作ったキルトをこの人骨の埋葬に使うとはどのような意味を持つのかを考えたい。以下は、一度掘り起こした白骨を、子どもの時にふたりでよく訪れたお気に入りの場所であったレッチド川近くの月桂樹の木の下に埋め直す場面である。

Carefully, carefully, Frank placed the bones on Cee's quilt, doing his level best to arrange them the way they once were in life. The quilt became a shroud of lilac, crimson, yellow, and dark navy blue. Together they folded the fabric and knotted its ends. Frank handed Cee the shovel and carried the gentleman in his arms. Back down the wagon road they went, then turned away from the edge of Lotus toward the stream. Quickly they found the sweet bay tree—split down

the middle, beheaded, undead—spreading its arms, one to the right, one to the left. There at its base Frank placed the bone-filled quilt that was first a shroud, now a coffin. (143-44)

Frank は Cee の作ったキルトの上に骨を生きていた時の姿のように丁寧に並べ、キルトで包み、その遺体を「紳士」(“gentleman”)として扱い、別の場所に埋葬して手作りの墓標を立てたのであった。ここまで丁寧に埋葬し直し、この埋葬に Cee のキルトがどうしても必要なのは、この白骨はかつて Frank と Cee の前で乱暴に埋められ、ふたりに衝撃を与えた遺骨であったからである。

Frank がこの埋葬を思いついたのは、妹が事実を受け入れ黙々とキルトを縫う姿を見たためである。その直後の独白の章で、Frank はこれまで語っていた朝鮮戦争で幼女を射殺した兵士とは自分であったと初めて認めている。Frank 自身も過去の出来事と向き合い、それを事実として受け入れる必要を感じたのである。Frank は罪の意識から少しでも解放されるために、いくつかの「やりがいのあること」(“worthwhile things”) (135) を思いついていた。そのひとつが、子どもの時に Cee と馬を見に行った際に偶然目撃した、乱暴な埋められ方をしていた死体を埋葬し直すことだったのである。この時に埋められた死体は、父と息子が闘犬代わりにどちらかが死ぬまでナイフで闘わさせられ、息子の命を救うために自ら刺殺された父親、つまり「子を守るために自己を犠牲にした父親」¹⁸⁾ だったのを、Frank は後に知ることになる。このような状況で我が身を犠牲にしてまで子を守るといった親の在り方に、Frank は衝撃を受けつつ、畏敬の念を抱いたのであった。

この父親の白骨化した遺体を Frank は、Cee が初めて作ったキルトに包んで埋葬しようとした。Frank が作った墓標には、「ここにひとりの男が立つ」(“Here Stands A Man”) (145) と書かれている。実際に Frank が埋葬用に掘った穴も縦長で、遺骨は立った状態で埋葬されるのである。闘犬代わりにされた男性を、「ひとりの人間」(a man) として弔う意味であろう。同時に、妹が自己と向き合いキルトを縫う姿に影響され、朝鮮戦争で幼女を殺害した事実と自分も向き合い乗り越えていこうとする Frank の姿だとも考えられる。Cee が Ethel たちから手伝ってもらい一生懸命に縫ったキルトで丁寧に埋葬し直すことで、Frank はこれまで過度に守ろうとしてきた妹の自立を認め、妹を守るのは自分しかないという強迫観念から解放されるのである。

そして、Cee にとっても、自分の作ったキルトが遺骨の埋葬に選ばれたことは、彼女の自信につながっている。Cee の自立にとり、同居する最も親しい他者である兄による過剰な保護から自由になることは必要不可欠である。最終章で示される詩のよう

な Frank の語りでは、白骨を埋葬した場所で月桂樹の木を見つめ立ち尽くす Frank に、Cee は “Frank?” と呼びかけた後に 「さあ、帰りましょう。兄さん」 (“Come on, brother. Let’s go home.”) (147) と言っている。これまで兄を Frank と呼んできた Cee があえて 「兄さん」と呼び方を変化させたのは、依存関係の解消を兄に示したのである。初めて作製したキルトで人骨を埋葬することで誰かの役に立つ人間になりたいとの願いがかない自信を持った Cee の姿がこの言葉に反映され、Cee の自立が兄と行った埋葬で完結したのである。

埋葬に用いたキルトは、「クレヨン色の棺」 (“the crayon-colored coffin”) (144) と言い換えられている。このキルトに用いている布は「薄紫、深紅、黄色、濃いネイビーブルー」 (“lilac, crimson, yellow, and dark navy blue”) (143) と一見まとまりがなさそうな色彩ではある。しかし、埋葬が終わった際の夕暮れ時の日が落ちる寸前の美しく清々しい風景描写に溶け込むようである。それぞれの「布 1 片」 (piece) が別々の色彩を主張しながらも「1 枚のキルト」 (whole) として完成した時には、まとまりのある「クレヨン色」という言葉が使われ調和が取れているのである。Cee のこれまでの出来事のひとつひとつ、そして Ethel の家で学んだ自己、つまり自分の考え方のひとつひとつをキルトの piece とすると、自分と向き合い、精神的・経済的自立の大切さを学び、これらを統合した Cee の姿がキルトの whole と重なりあう。そして、この Cee の自立の証であるキルトを、自分を犠牲にしてまで子の命を守ろうとした父親の埋葬に用いたことにより、一方が依存するのではなく、互いに自己を主張しつつも尊重し合う本来あるべき対等な兄と妹の関係が新たに築かれる。この、兄と妹がそれぞれ個性を保持しながら調和する新たな関係は、様々な色合いの調和が取れたクレヨン色のキルトという言葉で描かれるのである。

おわりに

本論では、Toni Morrison の *Home* に描かれているキルトを取り上げ、Cee の個人としての精神的自立、経済的自立、自立した上で他者との対等な関係を築くまでの過程がどのようにキルトと関連付けて描かれているのかを考察した。

町の女性たちからキルト作りを通じて他者との関係の在り方を学び、精神的自立を果たした Cee には、経済的自立の手助けとなる可能性がキルトによって示されるのである。そして、人骨の埋葬に自分が初めて作製したキルトが求められる。このキルトは、個性的な色彩をつなげて調和する「クレヨン色のキルト」と描かれることで、他者、特に最も親しい兄への依存関係を乗り越え、自己主張をしつつも互いに尊重し合う本来あるべき対等な兄と妹の関係の表象ともなるのである。

そのクレヨン色のキルトと兄妹の関係を支える、もう少し幅広い人間関係の枠組みとして、アフリカ系アメリカ人である Ethel の家の女性たちがいる。それぞれの個性を際立たせつつ、調和を保つこの女性たちの関係は Cee と兄との再構築された関係を支えるより大きな枠組みとして、豊かな色彩の中に調和の取れたキルトと重ね合わせて描かれているのである。

注

テキストは Toni Morrison, *Home* (London: Vintage, 2016) を用いた。ページ数は () 内に示す。

- 1) 森あおい「『闇』が語るもの—『白さと想像力』と『ジャズ』を中心に—『新たなるトニ・モリスン—その小説世界を拓く』風呂本惇子、他編（金星堂、2017）111.
- 2) 吉田勉子「自己と創造の文学」『ビラヴィド』シリーズもっと知りたい世界の名作の世界 8 吉田勉子編（ミネルヴァ書房、2007）7.
- 3) Valerie Smith, *Toni Morrison: Writing the Moral Imagination* (West Sussex: Wiley-Blackwell, 2012) 4.
- 4) 生まれた場所を故郷と定義した場合、兄妹にとりロータスは故郷ではない点を鶴殿えりかは指摘している。鶴殿えりか「ヘンゼルとグレーテルの変容—『ホーム』における兄妹の闘争」『新たなるトニ・モリスン』風呂本惇子、他編（金星堂、2017）216.
- 5) 鶴殿『新たなるトニ・モリスン』iii.

Toni Morrison の先行研究の傾向と主な研究書は以下の通りである。

- ・アフリカ系アメリカ人の文化と共同体との側面からは Patrick Bryce Bjork の研究がある。Patrick Bryce Bjork, *The Novels of Toni Morrison: The Search for Self and Place Within the Community* (New York: Peter Lang, 1992).
- ・人種的抑圧によってもたらされた痛み、羞恥、怒りを精神分析学、および精神医学からの分析は Jill Matus の研究がある。Jill Matus, *Toni Morrison* (Manchester: Manchester University Press, 1998).
- ・フェミニズム視点からは、Barbara Hill Rigney がこれまで見過ごされてきた声なき者に焦点を当てて分析している。Barbara Hill Rigney, *The Voices of Toni Morrison* (Columbus: Ohio State University Press, 1991).
- ・Linda Wagner-Martin はフェミニズムの中でも母性に焦点を当て、全作品を読み解いている。Linda Wagner-Martin, *Toni Morrison and the Maternal: From The Bluest Eye to God Help the Child* (New York: Peter Lang, 2019).

Toni Morrison とキルトについての先行研究としては以下の通りである。

- ・Kimberly Junita Brown, "Piecing Artistry: Mary Lee Bendolph, Toni Morrison, and Black Women's Circular Aesthetic Visions." *Piece Together: The Quilts of Mary Lee Bendolph*, ed. Andrea Packard (List Gallery, Swarthmore College and Holyoke College Art Museum, 2018).
8 March, 2021.

< https://moodle.swarthmore.edu/pluginfile.php/436811/mod_resource/content/1/Gees%20Bend%20CatalogFINAL_1.16.18_small.pdf >

- ・ Cathy Peppers, "Fabricating a Reading of Toni Morrison's *Beloved* as a Quilt of Memory and Identity." *Quilt Culture: Tracing the Pattern*, eds. Cheryl B. Torsney and Judy Elsley (Columbia: University of Missouri Press, 1994). キルトが描かれる場面に着目し、キルトが用いられるタイミングとアイデンティティーの関係について明らかにしている。
- ・ 藤平育子『カーニヴァル色のパッチワーク・キルト—トニ・モリスンの文学』（學藝書林、1996）。キルトが小さな布の切れ端を縫い合わせて構成されている点に着目し、奴隷制度により祖国から連れてこられたアフリカ系アメリカ人の心と身体の痛みを乗り越え回復させていく過程と、1枚のキルトの完成とを重ね合わせ、「断片」と「全体」という言葉を用いて論じている。

Home の中で描かれるキルトの先行研究は以下の通りである。

- ・ 鵜殿えりか『新たなるトニ・モリスン』。Frank と Cee の間にあった近親相関的な関係と埋葬に使用される Cee が作ったキルトとを関連付けて述べている。
 - ・ Valerie Smith, *Toni Morrison*. キルトについての言及はしているがあらずじに留まっている。
 - ・ 川村亜樹「雪の中の豹—ポスト人種のヴィジョンとトニ・モリスン『神よ、あの子を守りたまえ』」『衣装が語るアメリカ文学』西垣内磨留美、他編（金星堂、2017）。キルトが「自立した自己を確立する道具として機能している」点を指摘している。
- 6) Smith はつらい経験と記憶と対峙した兄と妹がトラウマから回復し、今後はかつて両親が住んでいた家がふたりの居場所となる可能性を示唆している。Valerie Smith, *Toni Morrison*, 135.
- 鵜殿は Frank と Cee の間に近親相関的な関係があったと指摘し、ふたりが戻るのは危険な家であると捉えている。鵜殿えりか『新たなるトニ・モリスン』214.
- 小泉泉は Frank の朝鮮戦争で受けた PTSD をベトナム戦争詩と関連付けて「故郷の喪失」という点から読み解いている。小泉泉「戦争と故郷—トニ・モリスンの『ホーム』と W. D. エアハートのベトナム戦争詩」『日本女子大学英米文学研究』（2016）121-137.
- 7) Brown, *Piece Together*, 48-52.
- 8) 風呂本惇子「『ホーム』を創る—トニ・モリスンの『ホーム』一つの読み」『エスニック研究のフロンティア：多民族研究学会創立10周年記念論集』多民族研究学会編（金星堂、2014）245.
- 9) 川村『衣装が語るアメリカ文学』170.
- 10) 鵜殿『新たなるトニ・モリスン』211-13.
Smith, *Toni Morrison*, 134-35.
- 11) 逃亡奴隷の少女を描いたコルソン・ホワイトヘッドの『地下鉄道』では、主人公のコーラは逃亡先で出会った親子にキルト作りを教えられるものの、上手く縫うことが出来ない。5歳の時に逃亡した母に置き去りにされ、それ以来縫物ができなくなったコーラと、母と娘で逃亡した親子の違いがキルト作りを通して描かれ、キルト作りは母が娘に教える伝統であることが示されている。コルソン・ホワイトヘッド『地下鉄道』谷崎由依訳（早川書房、2018）304-307.

- 12) 藤平『カーニヴァル色のパッチワーク・キルト』226-247.
- 13) 現在アフリカン・アメリカン・キルトはその芸術性が認められている。しかし、アメリカで芸術品として受け入れられ美術館に展示されたのは、2002年にホイットニー美術館で開催された *The Quilts of Gee's Bend* 展が最初である。この経緯については、John Beardsley et al., *The Quilts of Gee's Bend* (Atlanta: Tinwood Books, 2002) に詳しく述べられている。
- 14) Maude Southwell Wahlman, *Signs and Symbols: African Images in African-American Quilts* (Atlanta: Tinwood Books, 2001) 25.
- 15) アラバマ州にある通称 Gee's Bend という町では、奴隷であった祖先の子孫にあたる女性たちがキルトを作製している。女性たちは1966年に収入を得ることなどを目的とした集まりである Freedom Quilting Bee を組織し、ここで作製されたキルトは牧師を通じてニューヨークで販売されていた。Jane Livingston "Reflections on the Art of Gee's Bend." *The Quilts of Gee's Bend* (Atlanta: Tinwood Books, 2002) 54.
- 16) 川村『衣装が語るアメリカ文学』170-71.
- 17) アフリカン・アメリカン・キルトでは、細長い布の切れ端をつなぎあわせて上布に使用する点に特徴がある。このため材料の無駄がない。Caroline Crabtree and Christine Shaw, *Quilting, Patchwork and Applique: A World Guide* (London: Thames & Hudson, 2007) 178.
- 18) 山野茂「洞窟からハウス、ホームそして飛翔へー『ソロモンの歌』」『新たなるトニ・モリス』風呂本惇子、他編 (金星堂、2017) 49.